

■基本的な考え方■

出入口から容易に到達でき、かつ観覧しやすい位置に車いす使用者が利用できる観覧スペースを確保する必要がある。また、聴覚障害者用の設備を設けるように配慮する。

整備基準

9 固定式の観覧席又は客席(以下「観覧席等」という。)

1 観覧席等を有する施設には、次に定める構造の車いす使用者が利用できる部分（以下「車いす使用者用席」という。）を当該車いす使用者用席へ通ずる1の項（出入口）に定める構造の観覧席等のある室の出入口から当該車いす使用者用席に至る経路（2に定める構造の通路を含むものに限る。）の距離ができるだけ短く、かつ、観覧がしやすい位置に、観覧席等の総数が500以下の場合にあつては2以上、観覧席等の総数が500を超える場合にあつてはその総数に500分の1を乗じて得た数（その数に1未満の端数があるときは、これを切り捨てて。）に2を加えた数以上設けること。

- (1) 1席当たりの幅90センチメートル以上、奥行き1.1メートル以上とすること。
- (2) 床の表面は、滑りにくい材料で仕上げ、かつ、水平なものとすること。
- (3) 車いす使用者用席の後方に車いす使用者が円滑に出入り及び転回ができる部分を設けること。

2 観覧席等のある室の1の項(出入口)に定める構造の各出入口から車いす使用者用席に至る通路のうち、それぞれ1以上の通路は、次に定める構造とすること。

- (1) 幅は、内のリを1.2メートル以上とすること。
- (2) 高低差がある場合においては、2の項〔廊下等〕6(1)から(3)まで及び(5)に定める構造の傾斜路及びその踊場又は車いす使用者用特殊構造昇降機を設けること。

目標となる指針

9 固定式の観覧席又は客席(以下「観覧席等」という。)

1 不特定かつ多数の者が利用する観覧席等を有する施設には、次に定める構造の車いす使用者が利用できる部分(以下「車いす使用者用席」という。)を当該車いす使用者用席へ通ずる1の項(出入口)2に定める構造の観覧席等のある室の出入口から当該車いす使用者用席に至る経路(2に定める構造の通路を含むものに限る。)の距離ができるだけ短く、かつ、観覧がしやすい位置に、観覧席等の総数が500以下の場合にあっては3以上、観覧席等の総数が500を超える場合にあってはその総数に200分の1を乗じて得た数(その数に1未満の端数があるときは、これを切り捨てる。)に2を加えた数以上設けること。

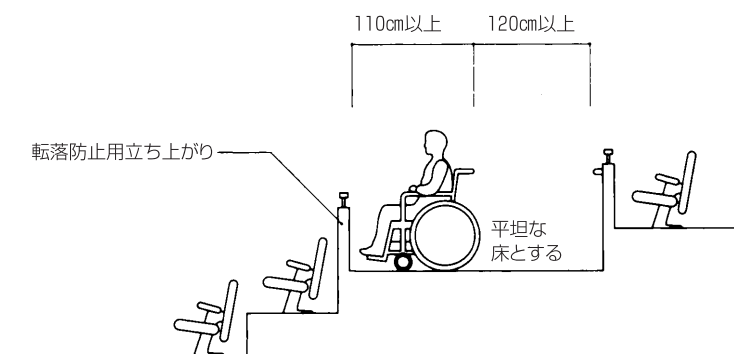
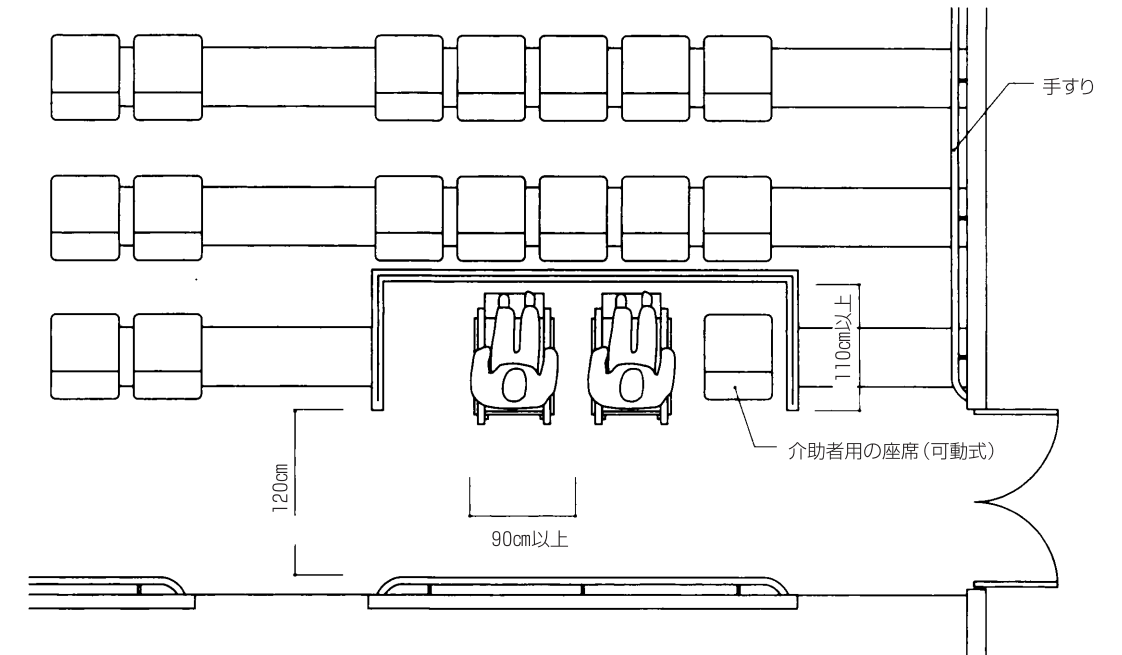
- (1) 1席あたりの幅90センチメートル以上、奥行き1.1メートル以上とすること。
- (2) 床の表面は、滑りにくい材料で仕上げ、かつ、水平なものとすること。
- (3) 車いす使用者用席の後方に車いす使用者が円滑に出入り及び転回ができる部分を設けること。

2 観覧席等のある室の1の項(出入口)2に定める構造の各出入口から車いす使用者用席に至る通路のうち、それぞれ1以上の通路は、次に定める構造とすること。

- (1) 幅は、内のリを1.2メートル以上とすること。
- (2) 高低差がある場合においては、2の項〔廊下等〕7の(1)から(3)まで及び(6)に定める構造の傾斜路及びその踊場又は車いす使用者用特殊構造昇降機を設けること。

3 催物において手話による通訳が行われる場合に手話の見えやすい位置に聴覚障害者のための観覧席等が確保できるようにするとともに、聴覚障害者の聴力を補う集団補聴装置等を設けること。

観覧席の例 (図1)



整備基準の解説

- 整備の対象
観覧席等を設ける場合には、観覧席等の総数に応じた車いす使用者用席を設ける。
観覧席等の総数が500以下の場合：2以上を車いす使用者用席とする。
観覧席等の総数が500を超える場合：総数×1/500+2以上を車いす使用者用席とする。
- 観覧席等の出入口の内のり幅90cmは、車いすで通過しやすい寸法。

項 目	解 説
1(3)構造	○直径140cmの円が内接できる程度のスペースを設ける。
2(1)幅	○通路の内のり幅120cmは、人が横向きになれば車いすとすれ違い、松葉杖利用者が円滑に通 過できる寸法。

目標となる指針の解説

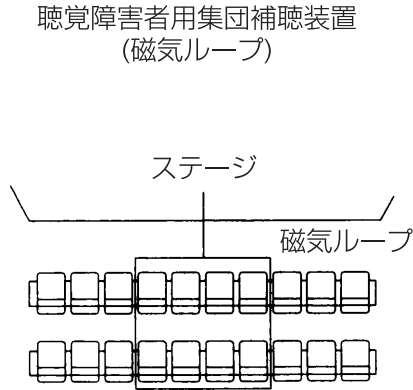
- 整備の対象
不特定かつ多数の者が利用する観覧席又は客席を設ける場合には、観覧席等の総数に応じた車いす使用
者用席を設ける。
観覧席等の総数が500以下の場合：3以上を車いす使用者用席とする。
観覧席等の総数が500を超える場合：全数×1/200+2以上を車いす使用者用席とする。
- 観覧席等の出入口の内のり幅90cmは、車いすで通過しやすい寸法。

項 目	解 説
3 聴覚障害者 用設備	○聴覚障害者が利用できる赤外線送受信装置、FM補聴装置（無線式）、磁気ループ等の集団 補聴装置を設ける。 ⇒図2参照・図3参照

配慮事項

項 目	解 説
1(1)席の構造	○車いす使用者用席の前面に転落防止用の立ち上がりを設ける。 ⇒図1参照
2(2)高低差	○基本的に高低差の解消はホール内でなく廊下等で行うようにする。
手すり	○壁際の通路には手すりを設ける。「配慮事項③手すり（P.88）」参照。 ⇒図1参照
介護者用座席	○車いす使用者用席に隣接して介護者用の座席（可動式）を設ける。
舞台	○高齢者や身体障害者等が容易に舞台上げられるように、段差のない動線の確保や昇降機 の設置等に配慮する。
楽屋	○楽屋等も身体障害者等が円滑に利用できるように配慮する。
親子観覧室	○乳幼児を連れた人の利用に配慮し、観覧席等に隣接して設ける。
一般の座席	○一般席の通路側のひじ掛けは、高齢者、身体障害者等が利用しやすいようにはね上げ式 にする。
設備	○文字情報を表示するための設備を設ける。 ○手話通訳スポット設備、OHP用設備を設ける。

集団補聴装置の例（図2）



聴覚障害者用集団補聴装置システム例（図3）

